

第二百八十二話 アッツ島、避け得た玉砕では！

大本営発表で初めて「玉砕」の文言が使用されたのが、1943(S18)/5/29のアッツ島玉砕である。アッツ島は、米国アラスカのアリューシャン列島最西端に位置する約900km²の島である。大東亜戦争の重要な戦略正面でもないツンドラ地帯の小島で、日米の死闘が繰り広げられ、日本軍2千名余りが玉砕したのだ。避け得た玉砕だったのではとの思いがする。

1 AO(アリューシャン)作戦の発動、占領

初期進攻作戦後の戦争指導を律する「今後採るべき戦争指導の大綱」(1942/3/7)は度々指摘しているように、陸海軍間、軍令部と連合艦隊間の意思統一が確立されぬままだった。連合艦隊は、渋る軍令部を脅迫し、第二段作戦として、AO, MI 作戦が計画、発動(1942/5/5)された。主作戦たるMI作戦の支作戦であるAO作戦は、6月初旬列島の付け根のダッチハーバー航空攻撃に始まり、海軍がキスカ島を、陸軍がアッツ島を無血占領して当初目的を達成した。AO作戦の狙いは、MI作戦の陽動作戦、北東方面からの連合軍空襲阻止、米ソ連絡遮断等であった。

アッツ島の陸軍部隊をキスカ島に移駐させ、10/30日には北海守備隊がアッツ島を再占領した。両島で飛行場建設と陣地強化が行われたが、地形上及び補給上、飛行場建設は遅々として進まなかった。



2 米軍の反攻とアッツ島の玉砕

自国領土に進攻された米軍は、1943(S18)年1月、反攻を開始、長距離爆撃機等による攻撃が連日行われ、キスカ島に近い島に飛行場を建設した。3月にはアッツ島沖海戦が起こった。そして、5月12日、米軍はキスカ島を飛び越してアッツ島に一個師団で上陸を開始した。1万2千名の兵力、一方的な艦砲射撃や爆撃で、山崎保代陸軍大佐以下2600名のアッツ島守備隊は奮戦空しく、29日最後の突撃を敢行、玉砕した。合掌

大本営は、5月21日、アリューシャン方面の放棄を決定し、キスカ島守備部隊を撤退させることとした。アッツ島守備部隊の撤退も検討されたが、陸海の調整がつかず断念の仕儀となった。この間、樋口北方軍司令官はアッツ島への逆上陸も検討したとされる。キスカ島撤退作戦はパーフェクトゲームと称されたのだが、一方陸軍守備部隊は玉砕した。

3 若干の観察

- (1) AO作戦はMI作戦の陽動たり得たのか、疑問だ。アッツやキスカ占領の狙いは何だったのか？MI作戦の妥当性を認めたとしても、釈然としない。
- (2) 米軍に対する哨戒線の推進だったのか？単なる哨戒線ではなく、防御陣だったのか？補給も叶わぬ、千島列島から1500kmも離隔し航空機支援を受けられぬ様な地に部隊を送り込む必然性があったのか？
- (3) 防御側の心理としてはなるべく前方でとの意識が強く作用するのは頷けるが、そこを我慢するのが、戦略家であり兵家である筈だ。前に出るほど薄くなるのは道理だ。AO, MI、南洋諸島と余りにも手を広げ過ぎだ。あちこちと気にはなるだろうが・・・
- (4) 南方ではガ島で死闘が展開され、山本連合艦隊司令長官が戦死する等の事件もあり、大本営や連合艦隊も混乱の坩堝であり、アッツ島の救援は出来なかったのかも知れぬが、抑々アッツ占領の必然性があったのかとの思いを禁じ得ない。
- (5) 避け得た玉砕ではなかったのか？MI作戦の妥当性にも相変わらず疑問
- (6) 万策尽きて救出不能、上級指揮官の慟哭の決断、断腸の思い如何許りか。死地に投じた筈ではなかったのだろうか。

(F)